

発行:SIGNIS JAPAN(カトリックメディア協議会)

代表:土屋至

発行所: 〒107-0052 東京都港区赤坂 8-12-42

聖パウロ女子修道会内

TEL 03-3479-3941 E-mail: info@signis-japan.org

https://signis-japan.org/

主のご降誕おめでとうございます

今年も間もなく終わります。日本漢字能力検定協会主催の「今年の漢字」に【戦】という字が選ばれた背景には、「サッカーワールドカップ」で日本が9位になったという明るい話題もあるのでしょう。一方、ロシアとウクライナの戦いが、大きく影響されているのではないでしょうか。未だに終結が見えず、苦しむ人が増え続けています。しかし、そんな中にも「主の降誕を祝う」という希望があるのではないでしょうか。一日も早く、終結して平和な日が来くることを祈りながらご降誕をお祝いいたしましょう。



シグニスのこれから

今年 2022 年は、シグニスジャパンにひとつの大きな展開がありました。それは、酒井俊弘 大阪教区補佐司教を新しく顧問司教としてお迎えし、8 月に韓国・ソウルで開催されたシグニ ス世界大会に一緒に参加していただけたことが契機となりました。これまでも東京教区の幸田



補佐司教、菊地大司教が顧問として私たちを支援してくださいましたが、オンラインでの会議が始まったこともあり、関東圏以外からも定例会に参加していただけるようになり、まさにインターネットを通して広い世界とつながることが、より身近な形で実現していると思います。

酒井司教の11月定例会でのお話の要旨をご紹介し、これからのシグニスの課題と展望をお伝えします。

自己紹介

私は大阪教区の補佐司教で、日本カトリック司教協議会(CBCJ)の広報担当をしております。カトリック中央協議会の広報三部門(広報課、出版部、カトリック新聞)の連携を促進する立場でもあります。国際的な仕事としては、来春開催のFABC(アジア司教協議会)の広報担当司教の集いに参加予定です。

日本の福音宣教とシグニスについて

日本の福音宣教には、ご存じの通り課題が山積しています。まず、「日本は宣教地(まだ十分にキリスト教が根づいていない場所)である」という認識が大事です。それでは、「一体何をすればいいのか」という課題が出てきます。皆さんが活躍しておられるこのシグニスジャパンでは、シグニスにしかできない福音宣教の役目があります。現在のメンバーが、それぞれの持ち味を発揮するのが大切です。さらには、「新しい人材」を発掘することが急務です。そのためには、メンバー一人ひとりがアンテナを張らなければなりません。

福音宣教のための広報ですから、様々なメディアを通して情報を広く伝え、インターネットを含めた技術も駆使し、全国津々浦々に福音を伝えていきましょう。皆さん一人ひとりの力が必要です。どうぞよろしくお願いいたします。

定例会後は、晴佐久神父のご提案により、「いっしょごはん」で楽しいひとときを過ごしました。私たちシグニスジャパンの活動の大きな柱である、カトリック映画賞上映会のことも話題になり、「やはり来年は上映会実現に向けて進んでもよいのでは」との司教様の言葉にメンバーの気持ちが明るく前向きになりました。

酒井司教、晴佐久神父と手を携えて「メディアを通した福音宣教」を実践していきたいと思います。そして、このシグニスの活動を共にしてくださる「新しい人材」を歓迎いたします。



素晴らしかったシグニス世界大会 2022 ソウル

今迄参加した中で一番充実し楽しめたシグニス世界大会だった。会期は8月 15 日より4日間、テーマは "Peace in the Digital World"(デジタル世界の平和)。会場は韓国ソウル市のソガン(西江)大学の講堂、宿舎は学生寮。リアル参加は34ヶ国、80名でZoom等のオンライン参加者を含めると総勢300人。コロナで、またはビザが取れずに参加できなかった国々が出た代わりに、オンライン参加・発表・討議がごく自然に組み込まれ、今までにない拡がりを感じた。特に若者の活躍が目立った。



閉会式後、カメラに収まる主要メンバー



韓国の若者が歌と踊りで会場を盛り上げた

日本からは酒井俊弘司教が1日フルに参加され、韓国 側が大喜びしてくれた。土屋会長と町田は4日間フル参 加した。開会式ではシグニス会長のヘレン・オスマン、 バチカン・広報の為の組織のルフィー二長官、韓国元首 相のハン大会委員長、ヨム枢機卿他が挨拶した。会議は 「ネットで繋がっていても孤独」、「フェイクニュースと 信頼の喪失」、「共通の家/地球を守る」の3つのセッシ ョンで、世界各地より大学教授や専門家を呼び寄せ、ま たはオンライン参加でパネラーとの間で内容の濃い議 論が続いた。また「国際ジャーナリスト・フォーラム」 と「若者のためのフォーラム」も熱気に包まれていた。 特に印象的だったのはロシアのジャーナリストで 2021年ノーベル平和賞受賞者のドミトリ・ムラトフ氏 のオンライン・インタビューとオンライン討議への参加 で、「ジャーナリストは事実をもって 憎悪と戦う義務が ある」と訴えた。またミャンマーからは過酷な状況下で の活動報告と連帯への切実な訴えがあった。



8/15 文化探訪 「悔い改めと償いの聖堂」前で集合写真

今回は韓国よりはメタバース(仮想空間)を使った各国 PR を要請され、日本としても手探り状態ながら、メタバース用のポスター、パネル、聖地マップ等を作成し、手渡し用のリーフレット「日本のカトリック教会一その歴史と現在」(日英韓)も作成し、専用英文サイトを開設した。お時間のある時にぜひ覗いてみてください。https://signis-japan.org/swc2022



メタバース 日本展示の前に立つアバター

今回は韓国のパワーと"おもてなし"に圧倒された。 1年延期をはじめ数多くの困難の中で頑張ったホスト国の韓国に感謝! 理論上はまだ北と戦争中との発言や非武装地帯 (DMZ) 見学で見た祖国統一への強い思い、韓国のデジタル文化や BTS にみるポップ文化の発信力、宣教師ではなく、市民がはじめた教会を誇りにし、また多くの殉教者を誇りにしている。日本は普段日本の教会の誇りを意識しているだろうか?我々ももっと発信力を磨かなくては。

(事務局 町田雅昭)





左 ドミトリ・ムラトフ氏へのインタビュー 右 ナムビアからの発表

インターネットチームの 2022 年

この一年を振り返ると、シグニスインターネットチームにとっては、トンネルの中をかすかな光を頼りに通り抜けるような年となりました。新型コロナウイルスの脅威もまだ終わりが見えない中、教会のオンライン活用について考え、より良く活かす方法について考えては来たものの、この状況をどのように打開するべきなのか、あるいはコロナ禍を通して得た教訓から何をどう工夫して、今しかできないことをどのようにして見つけたら良いのか、さらには教会にはどのようなニーズがあるのか、シグニスとしても今一つ切り口を見つけることができないまま待降節を迎えました。

今のところ、毎年2月から3月にかけて開催している「『教会とインターネット』セミナー」について、具体的に決まっていることはありません。前回(2022年2月)に続いて、酒井司教を講師にお迎えして、教会広報について参加者と意見交換を行いながら考えていくという可能性もあります。いずれにしても、このテーマを共に考えてくれる新しい仲間を私たちは必要としていますし、宣教や広報に関心を持つ多くの皆様とつながることのできるセミナーのあり方を模索しなければなりません。

インターネットチームが 2022 年に取り組んだ大きな活動として、「ピスティスの庭へようこそ」というオンライン信仰入門講座をご紹介したいと思います

(https://pistis-garden.net/el/)。もちろん、信仰入門というものは共同体に支えられてキリストへ向かう歩みですので、これだけで直接受洗につながるものではありません。しかし、集まりのできない状況における、新たな学びの道具になるものです。

内容の源泉は、シグニス会長で清泉女学院中学高等学校で宗教科教諭をつとめてきた土屋至氏がカトリック鶴見教会で長年にわたり行ってきた入門講座です。その多岐に渡ってキリスト教と人間について考える様々な工夫の数々を埋没させることなく次代に活かしたい熱意から、このプロジェクトは生まれました。これに、上智大学神学部講師で日本カトリック典礼委員会委員の石井祥裕氏が編集を行いながら実践神学の内容を補い、この原稿を書いている筆者も上智大学で教えている旧約聖書の内容を持ち寄り、一応の完成を見たものです。

利用したシステムは ムードル (Moodle)という e ラーニングプラットフォーム、つまり学習管理システム、オンライン教育システムです。これは現在多くの若い学生も利用しているもので、どなたにも簡単に、無料でお使いいただけます。ぜひ一度ご覧になっていただければ幸いです。

ピスティスの庭へようこそ

はじめに

「ピスティスの庭へようこそ」は、キリスト教についてもっと学びたい、キリスト教を自分の生き方に取り込みたいという人のための講座です。

コース一覧

ステップ3 教会との出会い ピスティスの庭へようこそ - はじめに ステップ1 - 自分との出会い、人との出会い ステップ2 イエスと聖書の出会い

(Moodle より)

暗闇の中に小さな光をお迎えする待降節が終わり、 降誕祭を迎えました。この光が大きく輝くことを願いつ つ、新しい年、活気あるチーム作りに努めたいと思いま す。

(インターネットチーム 石原良明)

今年と来年の映画チーム

2020 年初めからのコロナ流行によって、毎年開催していた日本カトリック映画賞の授賞式と上映会ができなくなって約3年が経ちました。これまでは世界広報の日前後に開催し、会場に来ていただいた方々と共に授賞作品を鑑賞し、授賞式および監督と晴佐久神父との対談、という構成で開催していました。

しかしコロナ禍で、会場の確保をはじめ、今までのやり方では運営が難しくなり、なんとか形を変えて上映会ができないか模索してきました。昨年は都内の小さな映画館で映画賞と授賞式をと交渉を重ねてきましたが、緊急事態宣言や蔓延防止措置、ほかにもさまざまな理由が重なり、実施することはできませんでした。

しかしながら、今年5月21日には、一昨年、昨年と同様、カトリック浅草教会に授賞作『梅切らぬバカ』の和島香太郎監督をお迎えして授賞式を行い、美しい庭を背景に監督と晴佐久神父との対談を非公開で実施いたしました。その模様は、SIGNIS JAPANのホームページからご覧いただけます。

https://signis-japan.org/

現在第47回の日本カトリック映画賞の授賞作選定を行っております。そして来年こそは小規模でも上映会を開催したいと考えています。また、これまではその年の授賞作のみを上映して皆さんに観ていただく形をとっていましたが、これまでの優れた作品が46もありますので、上映可能な作品を選び、感染対策を徹底しながら皆さんに観ていただくことができないかと模索中です。

1日も早くコロナが収束し、皆様と映画を観、作品について分かち合いのできる日が来ることを願ってやみません。

(映画チーム 鵜飼恵里香)

シグニスメンバーからのひとこと

映画を観ると心に留めたい言葉を探してしまいます。劇場版『荒野に希望の灯をともす』を観ました。 中村哲さんの言葉です。

「暗ければこそ光を 寒ければこそ火を」

(H.S.)



谷津賢二監督/2022 年/日本/90 分

戦火のアフガニスタンで 21 年間継続的に記録した映像から、これまでテレビで伝えてきた内容に未公開映像と現地最新映像を加え劇場版としてリメイク。混沌とする時代のなかで、より輝きを増す中村哲の生き方を追ったドキュメンタリー。(映画公式サイトより)

今年は何と言っても8月までは世界大会準備、そして本番、とても充実していた。韓国も熱が入っていたし、好意的に対応してくれた。昨日韓国より「シグニス世界大会白書」が届いた。A4で503頁の大作。同封のレターの最後に"Please remember that SIGNIS Korea members love you and your country."とあり、胸が熱くなった。誠心誠意、心は伝わる。お互いを尊重して大切な隣人として生きていきたい。 (T.M.)

今年観た映画の中で1月に公開される「ドリーム・ホース」の台詞が私の心に突き刺さりました。「ドリームが来るまで、私たちはどうだった? 職やコミュニティーを失い、誇りさえ失なってた。ドリームが希望のある人生を思い出させてくれた。そのドリームが苦しんでいる。いのちは風前の灯火。数千ポンドのために殺してしまうというの?」「ドリームは何も求めない。与えるばかりだ」与えられることばかり望むのではなく私たちが与えられるものは何か神様から問われているなよう台詞でした。(E.U.)

コロナ禍3年目、毎月行われる定例会も、リアルとオンラインでハイブリット会議というのでしょうか、音声の環境設定に苦労しながらも、慣れてきました。そんな中で、カトリック映画賞の授賞式と監督との対談、インターネットセミナー、小さな勉強会と、仲間と力を合わせて、イベントも開催できました。コロナには、負けないぞ!!!

8月のSWC2022、残念ながら現地参加は見送りましたが、毎日インターネットにかじりつき、心はソウルに飛んでいました。ジャーナリストたちの熱い言葉、若者たちのはじける熱気、それを実現した韓国シグニスの力。メタバースも面白い体験でした。1年半、毎月のオンラインでの準備会はシグニスの活動を越えて自分自身の勉強になりました。中心的に進めてくださった町田事務局長に感謝です。メンバーの皆さま、ありがとうございました。

これからもシグニス韓国とのつながりを大切にし、 隣国に思いを寄せたいと思います。 (S.I.)



ミサ後の夕闇の明洞大聖堂

\sim As a Friend of the Neighboring Country \sim





今年もシグニスジャパンを応援していただき 心より感謝いたします。

新しい年に、平和と喜びがありますように。 シグニスジャパン一同

